

報告

短期大学における教育・保育実習に関する異学年交流学習の教育効果

宮崎 大樹^{1*}, 浜田 幸作¹, 池澤 真由美¹, 末田 光一¹, 竹村 正¹,
吉村 齊¹, 寺尾 康¹, 田村 由香¹, 山本 英作¹, Paula D.Fabian¹

要約: 本研究は、短期大学において1年生と2年生の学生による、教育・保育実習に関する異学年交流学習会の教育効果をアンケート結果から分析し、考察を加えたものである。調査対象は短期大学教員養成系学科に所属する学生であり、平成29年度1年生86名、平成30年度1年生83名及び2年生82名である。平成29年度の調査結果を基に、交流学習会のあり方を学科教員で検討し、内容に改善を加えた上で平成30年度の交流学習会を実施した。主な結果は以下の通りである。平成29年度の調査において交流学習会に肯定的評価をした学生は87.1%であった。平成30年度の調査においては、1年生から98.7%、2年生から71.7%の肯定的評価があった。さらに、アンケート結果から、2年生は1年生時の交流学習会及び実習での経験をもとに1年生に対するアドバイスの内容を意識的に構成していることが明らかになった。以上の結果を詳細に分析し、短期大学における教育・保育実習に関する異学年交流学習会の教育効果を明らかにして、今後の異学年による交流学習の方向性を示すこととする。

キーワード: 異学年交流学習会, 教員養成系短期大学, 実習不安, 保育士, 幼稚園教諭

I はじめに

幼稚園教諭免許状を取得するためには、教育実習による単位を5単位修得することが必要であることは、教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則¹⁾により定められている。また、保育士を養成する学校その他の施設を卒業するための最低履修単位として、保育実習5単位の修得が必要であることは、児童福祉法等²⁾により定められている。そのため、短期大学幼児教育教員養成系学科に所属する学生は、在学中に幼稚園や保育所等で実習を行い、必修単位を取得する。なお本稿では、教育実習及び保育実習、施設実習については、それらを合わせて実習と記述することとする。

実習は学生にとって単位修得のために必要とな

るだけではない。藤崎ら³⁾によると、教育実習の経験は、保育者としての力量を身につけ、保育者効力感を高めることができた実感していることが伺える。三木・桜井⁴⁾も教育実習は保育者効力感をほぼ高める傾向にあると述べている。つまり、現場に出て実践的な学びを学生のうちに体験し、保育者としての力量を身につけ、さらに保育者効力感をも高める貴重な機会となっている。

一方で、入学間もない学生が社会に飛び込むという精神的な負担の大きな取り組みでもある。学生は実習が近づくと、不安を一様に抱え、緊張の度合いが高くなる様子が見られる。授業の中で準備や心構えについては十分に伝えてはいる。それでも、未知の世界に飛び込む学生にとって、安心

¹高知学園短期大学 幼児保育学科 *Email: dmiyazaki@kochi-gc.ac.jp

するには十分ではないことが日常の様子から伺える。荻野⁵⁾によると、教育実習に関わるストレスを理解し、ストレスマネジメント法を身につけたうえで教育実習に臨むことは、実習生の心身健康に寄与するのみならず、実習をより学びの多いものとする上で有効である。枝元⁶⁾も教育実習生が不安なく気持ちを高めて実習に臨むことで効果的な経験をたくさん積み、教職への志向性を高められるように事前授業において指導を行うことは、極めて重要であると指摘している。それゆえ、学生の不安やストレスを軽減させる取り組みを事前学習において行うことは、大きな意味がある。

不安内容に関して、大野木・宮川⁷⁾によると、教職課程履修の大学生にごく一般的にみられる心配・不安（教育実習不安）は、少なくとも「授業実践力」「児童・生徒関係」「体調」「身だしなみ」の4つの次元から構成されている。また、本多・櫻井⁸⁾は幼稚園教育実習不安の類型ごとに、個々の学生に対応した心理的支援を検討する必要があると述べている。そのように、不安の内容は様ではなく、全学生のすべての不安を完全に解決することは困難である。

善明・南本⁹⁾によると、不安の強さと教育実習での実習生の行動や第三者による評価には直接的な関係は認められなかった。その上で、問題は不安の強さ自体にあるのではなく、それをプラスに転換させる指導教諭の支援（厳しさを含めた）や生徒との新鮮な出会いであり、そこでの当人の気づきであることを示唆している。つまり、不安を持つこと自体はネガティブな側面ばかりと捉えるべきではない。むしろ、不安の内容を実習前に明らかにし、自覚した上で共有しておくことが大切である。不安の主体はあくまで自分自身であり、不安が大きい状況は本来教育活動において主体とすべき対象、すなわち子どもへの認識の主体が至っていない状態と考えることができる。自己の不安を整理し、向き合い、共有することが認識の主体を子どもへと移行させるためのプロセスとして必要不可欠であるとすれば、早い段階で不安を整理し共有しておくことが実習の教育効果をより

高めることにつながると考えられる。谷川¹⁰⁾はリアリティ・ショックを契機として、保育行為における主体の認識が自分から子どもへ移行し、保育者の援助や役割について新たな認識を獲得していたと指摘している。リアリティ・ショックはポジティブな側面を持っているのであるから、ポジティブにリアリティ・ショックを捉えられる心理的な準備を事前学習で整えておくことは、極めて大事なことである。

そこで、筆者の所属機関では平成29年度に1年生と2年生が交流を通して実習について学ぶことを大きなねらいとして、「異学年相互交流学習会」を企画し、実施に移した。これは各学年の実習に対する事前事後指導を総合して学びあう教育活動であり、平成29年度は試行的に授業時間外に設置した。その上で、平成30年度にいくつかの改善を加えた。

異学年間の交流学習は初等・中等教育において多く実践されている学習で、そのねらいは多様であるが、主に社会性を育てることや行事の振り返り・報告などが一般的である。また近年、実習後に下級生との交流による学びに取り組む例¹¹⁾も見られる。しかし、本学習会では、実習の事前学習として、1年生と2年生の交流を通して、実習への理解を深めるとともに、精神面も含めて具体的な準備について認識を深め、1年生の実習不安を軽減することを主な目的とした。開催時期は両年度ともに8月上旬の実施であった。本学の場合、8月上旬の開催時期は、2年生にとっては1年次の保育実習Ⅰ－1（2週間）、科目「教育実習の研究」の中で行われる2月の教育実習（1週間）と翌年6月の教育実習（4週間）の3回の実習を終えている時期である。それに対して、1年生は実習に一度も出たことがなく、初めての実習となる9月の保育実習Ⅰ－1を前に緊張を感じている時期である。また、2年生は1ヶ月の幼稚園実習を終えたばかりで、記憶も新しい状態であるといえる。以上の理由から、この時期の交流学習会が最適であると考え、実施するに至った。

II 目的

本研究では、異学年相互交流学习会における意見交換の展開と学生の受け止めにに基づき、学生各自が自身の成長過程と反省を自覚することで、次の実習に向けた準備状況の向上を目指すこととする。さらに、今後の課題から次年度以降に向けた改善点を明らかにすることを目的とする。

III 方法

1 研究方法

平成29年度学習会終了時に1年生を対象に、平成30年度学習会終了後に1年生及び2年生を対象にアンケート調査を実施したものを分析し、検討を加える。

アンケートの内容は、1年生には両年度共通のものを使用(表1)した。なお、1年生対象のアンケートは、学習会に関する総合的評価、先輩からのアドバイス、今後の実施に対する期待のカテゴリーから構成されている(図1)。

また、2年生対象のアンケート作成に当たり、アンケート①(図2)として、平成29年度の交流学习会が実習に役立つものであったかどうかを問うものとした。さらに、アンケート②(図3)として平成30年度の交流学习会についても回答を求めた。

なお、本交流会は、2年生にとっては「保育実習Ⅰ-1」及び「教育実習」の成果、1年生にとっては「保育実習指導Ⅰ-1」のふり返りと「教育実習の研究」への準備として設置した活動である。授業時間には組み込まれていないものの、両学年の学生にとっては各実習の効果を高める上で貴重な機会となる。また、ここでの学びが後期の実習に関する事前指導に向けた課題発見の場にもなる。そこで、幼児保育学科では、本交流会を教育課程外における授業に準ずる取り組みとして位置づけて研究を進めることとした。研究対象となる学生には、こうした背景と、特に交流会の成果を分析することで授業改善へ活用する趣旨を十分に説明した。その上で、インフォームド・コンセントに基づき進められた。

2 研究対象

対象は、高知学園短期大学幼児保育学科に所属する学生、平成29年度1年生86名及び平成30年度1年生82名、2年生83名である。調査は平成29年8月及び平成30年8月に実施したアンケートである。

IV 結果

国立教育政策研究所生徒指導研究センター¹²⁾は、効果をあげる「交流活動」の三つのポイントとして、①「関わる喜び」が獲得できる活動を設定しているか、②年長者が主体的に取り組める活動になっているか、③全教職員が「交流活動」で子どもが育つメカニズムを正しく理解し、適切な対応ができる仕組みになっているか、を挙げている。そこで、効果的な交流学习会となるように、平成29年度は以下のように計画し、実施した。

まず、交流学习会は2部構成とした。第1部を全体会とし、第2部を班別学習会とした。全体会は、「教育実習の研究」の授業で幼稚園における教育実習の事後学習として、2年生の学生各自がまとめた発表原稿を参考に、7名の発表者を授業担当者が選出し、発表する方法を用いた。班別会は実習先の地域ごとに1年生と2年生合同の班を作り、実習に関する情報提供及び質疑応答と協議を行った。班別会の司会・進行及び記録は2年生が担当することとし、教員は各グループの担当として参加する形式とした。

平成30年度は、平成29年度実施後のアンケート調査の結果をもとに学科教員で協議し、内容の充実を目的に交流学习会の内容及び方法に変更を加え、平成30年度の交流学习会を実施した。大きな変更点は、1点目が班別学習会の班割りであり、2点目が班別学習会の方法であった。

【1】 この学習会はあなたにとって、良かったですか。

- a とても良かった
- b やや良かった
- c 普通
- d あまり良くなかった
- e まったく良くなかった

【2-1】 【1】でaやbと答えた人は、何が良かったですか。

- a 全体会での発表
- b 班別学習会
- c 両方

【2-2】 それはどういう理由からですか（複数選択可）

- a 本学の方針やポリシーが理解できた
- b 就職やマナーについて学べた
- c 実習への不安が解消された
- d 実習の心構えに役立った
- e 実習施設のこと分かった
- f 先輩からのアドバイスがためになった
- g その他（具体的に： ）

【2-3】 先輩からのアドバイスで良かったことは何ですか（複数選択可）

- a ピアノや手遊び、絵本など事前準備の大事さが理解できた
- b 先輩の失敗経験や良かった体験などが参考になった
- c 笑顔やハキハキ話すこと、明るさなどが必要なことを聞いて参考になった
- d 遅刻早退などしないように日ごろの基本的な生活習慣と健康管理が大事なことを学んだ
- e 子どもの発達段階による支援の仕方などを聞いて勉強になった
- f 子どもにしていいこと、してはいけないことなどが聞いて実行しようと思った
- g 授業と実習の違いが良く分かった
- h 日ごろの授業の大切さが分かった

- i 観察実習で注意すべき点分かった
- j 観察実習と責任実習の違い分かった
- k 実習に必要な準備物が分かった
- l 自分の意識改革につながった
- m 上級生も同じ不安を抱えていたことが分かって共感を覚えた
- n 日誌などの書き方の知識を得た
- o 幼稚園と保育園の違いやそれぞれの園の違いなどが分かった
- p その他（具体的に： ）

【3】 【1】でdやeと答えた人は、何が良くなかったですか。

- a 本学の方針やポリシーが分からない
- b 就職やマナーが理解できない
- c 実習への不安が解消されなかった
- d 実習の心構えに役立たなかった
- e 先輩からのアドバイスが不十分だった
- f 先輩との交流が十分できなかった
- g 実習に関する情報が不十分で、実習施設の様子が分からなかった
- h その他（具体的に： ）

【4】 来年の実施に際して、あなたは何を期待しますか（複数選択可）

- a 本学や幼児保育学科の方針等
- b 就職情報
- c マナー指導
- d 全体会での班別報告の実施
- e 日誌や指導案の書き方練習
- f 幼稚園と保育所での実習の違いの説明
- g その他（具体的に： ）

【5】 この交流学習会に対して、あなたの意見や要望など率直な意見を述べてください。

図1 1年生用アンケート（平成29年・30年度共通）

【1】 昨年度のこの学習会はあなたにとって、実習に役立つものでしたか。

- a とても役立った
- b やや役立った
- c 普通
- d あまり役立たなかった
- e まったく役立たなかった

【2-1】 【1】でaやbと答えた人は、何が役立ちましたか。

- a 全体会での発表
- b 班別学習会
- c 両方

【2-2】 それはどういう理由からですか（複数選択可）

- a 本学の方針やポリシーが理解できたから
- b 就職やマナーについて学べたから
- c 実習への不安が解消されたから
- d 実習の心構えに役立ったから
- e 実習施設のこと分かったから
- f 先輩からのアドバイスがためになったから
- g その他（具体的に： ）

【2-3】 昨年度のこの学習会において、先輩から受けたアドバイスについて実習に役立つことは何ですか（複数選択可）

- a ピアノや手遊び、絵本など事前準備の大事さ
- b 先輩の失敗経験や良かった体験など
- c 笑顔やハキハキ話すこと、明るさなどが必要なことを聞いたこと
- d 遅刻早退などしないように日ごろの基本的な生活習慣と健康管理が大事なこと
- e 子どもの発達段階による支援の仕方など
- f 子どもにしていいこと、してはいけないことなどが聞いたこと
- g 授業と実習の違いが良く分かったこと

- h 日ごろの授業の大切さが分かったこと
- i 観察実習で注意すべき点分かったこと
- j 観察実習と責任実習の違い分かったこと
- k 実習に必要な準備物が分かったこと
- l 自分の意識改革につながったこと
- m 上級生も同じ不安を抱えていたことが分かって共感を覚えたこと
- n 日誌などの書き方の知識を得たこと
- o 幼稚園と保育園の違いやそれぞれの園の違いなどが分かったこと
- p その他（具体的に： ）

【3】 【1】でdやeと答えた人は、なぜ役に立たなかったと思いますか。

- a 本学の方針やポリシーが分からなかったから
- b 就職やマナーが理解できなかったから
- c 実習への不安が解消されなかったから
- d 実習の心構えに役立たなかったから
- e 先輩からのアドバイスが不十分だったから
- f 先輩との交流が十分できなかったから
- g 実習に関する情報が不十分で、実習施設の様子が分からなかったから
- h その他（具体的に： ）

図2 2年生用アンケート①

短期大学における教育・保育実習に関する異学年交流学習の教育効果：教育方法学

- 【1】 今年度のこの学習会はあなたにとって、良かったですか。
- a とても良かった
 - b やや良かった
 - c 普通
 - d あまり良くなかった
 - e とても良くなかった
- 【2-1】 【1】でaやbと答えた人は、何が良かったですか。
- a 全体会での発表
 - b 班別学習会
 - c 両方
- 【2-2】 それはどういう理由からですか（複数選択可）
- a 1年生に本学の方針やポリシーを伝えることができたから
 - b 1年生に就職やマナーについて伝えることができたから
 - c 1年生の実習への不安を解消することができたから
 - d 1年生に実習の心構えについて伝えることができたから
 - e 1年生に実習施設のことについて伝えることができたから
 - f 1年生に先輩としてアドバイスができたから
 - g その他（具体的に： ）
- 【2-3】 意識して1年生にアドバイスしたり伝えたりしたことは何ですか（複数選択可）
- a ピアノや手遊び、絵本など事前準備の大事さ
 - b 自分の失敗経験や良かった体験など
 - c 笑顔やハキハキ話すこと、明るさなどが必要なこと
 - d 遅刻早退などしないように日ごろの基本的な生活習慣と健康管理が大事なこと
 - e 子どもの発達段階による支援の仕方など
 - f 子どもにしていいこと、してはいけないことなど
 - g 授業と実習の違い
 - h 日ごろの授業の大切さ
- i 観察実習で注意すべき点
 - j 観察実習と責任実習の違い
 - k 実習に必要な準備物
 - l 自分の意識改革について
 - m 自分たち上級生も同じ不安を抱えていたこと
 - n 日誌などの書き方の知識
 - o 幼稚園と保育園の違いやそれぞれの園の違いなど
 - p その他（具体的に： ）
- 【3】 【1】でdやeと答えた人は、何が良くなかったですか。
- a 1年生に本学の方針やポリシーを伝えることができなかったこと
 - b 1年生に就職やマナーを理解させることができなかったこと
 - c 1年生の実習への不安を解消できなかったこと
 - d 1年生の実習の心構えに役立たなかったこと
 - e アドバイスが十分にできなかったこと
 - f 後輩との交流が十分にできなかったこと
 - g 実習に関する情報や実習施設の様子を十分に伝えられなかったこと
 - h その他（具体的に： ）
- 【4】 来年の実施に際して、あなたはどのような内容を取り入れるとよいと思いますか（複数選択可）
- a 本学や幼児保育学科の方針等
 - b 就職情報
 - c マナー指導
 - d 全体会での班別報告の実施
 - e 日誌や指導案の書き方練習
 - f 幼稚園と保育所での実習の違いの説明
 - g その他（具体的に： ）
- 【5】 この交流学習会に対して、あなたの意見や要望など率直な意見を述べてください。

図3 2年生用アンケート②

平成29年度は1年生62名から提出があった。また平成30年度は、1年生77名、2年生75名から提出があった。両年度とも、当日欠席した学生はいたが、出席した学生全員からアンケートの提出があり、回収率は100%であった。ただし、記入漏れや記入ミス等があり、質問項目によってはデータの個数がアンケート提出数と一致しないものもある。

1 2年生における交流学習会の効果

【昨年度の交流学習会が実習に役立つものであったか】には、64%の学生が肯定的評価をした。1年生のときに【学習会は自分にとって良かったか】について答えた割合と比較すると、肯定的評価は87.1%から64%になり、23.1%減少した。さらに、否定的評価（「余り良くなかった」または「まったく良くなかった」）を選択した学生は0%から8%に増加した。詳細を表1に示す。

表1 1年生時の満足度及び交流学習会が実習に役立つものであったか

項目	1年生時 満足度		2年生時 役立ったか	
	人数	割合	人数	割合
a とても良かった	30	48.4%	14	18.7%
b やや良かった	24	38.7%	34	45.3%
c 普通	8	12.9%	21	28.0%
d 余り良くなかった	0	0.0%	2	2.7%
e まったく良くなかった	0	0.0%	4	5.3%

表2 何が良かったと感じたか及び実習には何が役に立ったか

項目	1年生時 何が良かったか		2年生時 何が役立ったか	
	人数	割合	人数	割合
a 全体会での発表	5	9.3%	2	4.3%
b 班別学習会での交流	31	57.4%	28	59.6%
e 両方	18	33.3%	17	36.2%

肯定的評価をした2年生に【何が良かったか】を問う質問には全体会と答えた学生が少なく、班別会と答えた学生が多かった。この結果は、1年生のときの割合と大きくは変わらないものとなっている。なお、回答結果の詳細については表2に示す。

さらに、【どういう理由から良かったと感じたのか】を、複数選択可として問うた質問には、1年生時には「先輩からのアドバイスがためになった」と答えた学生が最も多かった。一方、実際の実習には「実習の心構え」に役に立ったと答えた学生が多かった。回答結果の詳細については表3に示す。

続いて、【先輩からのアドバイスで実習に役立ったこと】では、「ピアノや手遊び、絵本など事前準備の大事さが理解できた」や「先輩の失敗経験や良かった体験などが参考になった」が1年生時に多くの学生が良かったと感じていた。さらに、2年生時にも同様の回答が見られた。それゆえ、

特に具体的な活動のアドバイスが実習にも役立ったと感じたことを示す結果となった。なお、回答結果の詳細については図4に示す。

表3 良かったと感じた内容及び役に立ったと感じた内容の詳細

項目	1年生時 何が良かったか 人数	2年生時 何が役立ったか 人数
a 本学の方針やポリシーが理解できた	5	3
b 就職やマナーについて学べた	13	4
c 実習への不安が解消された	25	21
d 実習の心構えに役立った	38	43
e 実習施設のことが分かった	6	10
f 先輩からのアドバイスがためになった	40	26
g その他	0	3

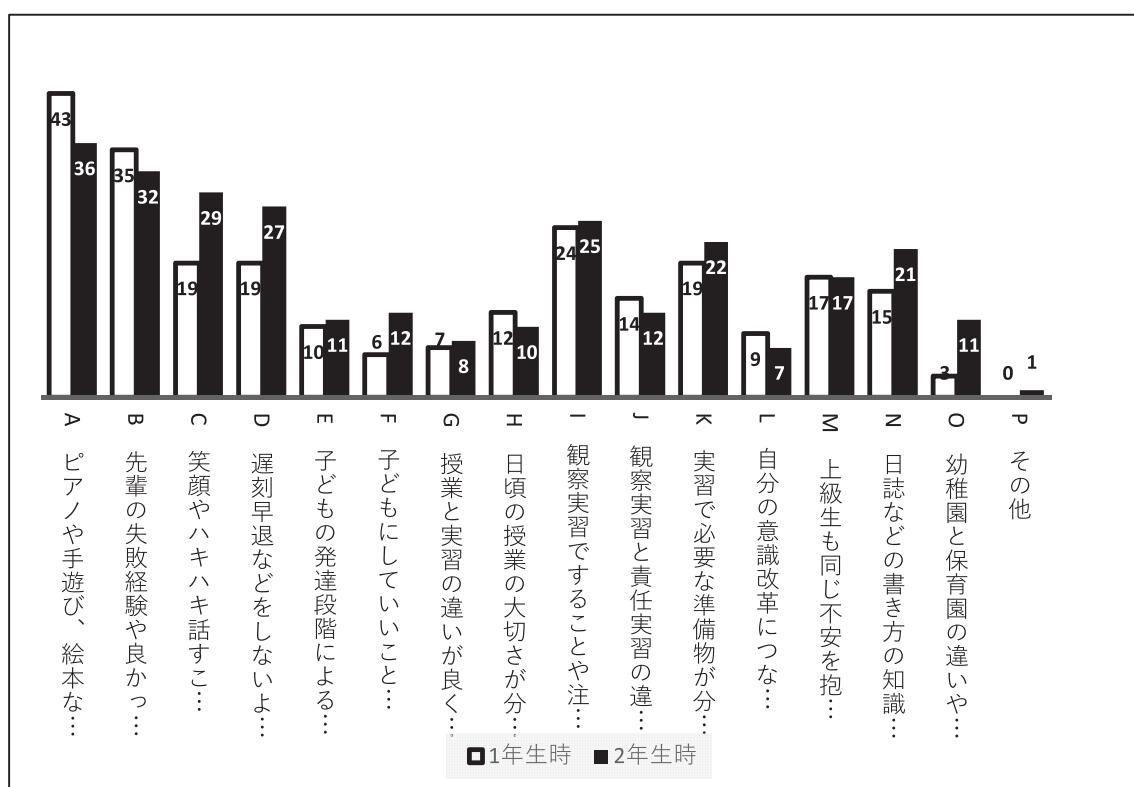


図4 先輩のアドバイスで良かったことと実習に役立ったこと

最後に、質問【1】に否定的評価をした学生に、【なぜ役に立たなかったか】を問うた質問には、「実習の心構えに役に立たなかった」という答えが最も多かった。詳細を表4に示す。

表4 なぜ役に立たなかったのか

項目	人数
a 本学の方針やポリシーが分からなかったから	1
b 就職やマナーが理解できなかったから	0
c 実習への不安が解消されなかったから	2
d 実習の心構えに役に立たなかったから	3
e 先輩からのアドバイスが不十分だったから	1
f 先輩との交流が十分できなかったから	2
g 実習に関する情報が不十分で、実習施設の様子が分からなかったから	0
h その他	0

2 平成30年度交流学习会における1年生への教育効果と2年生の意識

2年生は1年生のときに交流学习会を経験し、その後3回の実習を行った上で2回目の交流学习会を迎えることになる。平成30年度の調査における2年生用アンケート②と1年生用アンケートの結果を比較して以下に示す。【学習会は自分にとって良かったか】に「とても良かった」または「やや良かった」と肯定的評価をした学生は、2年生が71.6%、1年生が98.7%であり、特に1年生に高い評価が見られた。詳細は表5に示す。

肯定的評価をした学生に【何が良かったか】を問う質問には全体会と答えた学生が少なく（2年生5.4%、1年生0.0%）、班別学習会と答えた学生が多かった（2年生53.6%、1年生44.7%）。また、両方と答えた学生は2年生41.1%、1年生55.3%であった。詳細は表6に示す。

表5 平成30年度の学習会は自分にとって良かったか

項目	2年生		1年生	
	人数	割合	人数	割合
a とても良かった	27	36.5%	75	97.4%
b やや良かった	26	35.1%	1	1.3%
c 普通	20	27.0%	1	1.3%
d 余り良くなかった	1	1.4%	0	0.0%
e まったく良くなかった	0	0.0%	0	0.0%

表6 何が良かったか

項目	2年生		1年生	
	人数	割合	人数	割合
a 全体会での発表	3	5.4%	0	0.0%
b 班別学習会での交流	30	53.6%	34	44.7%
C 両方	23	41.1%	42	55.3%

さらに、【どういう理由から良かったと感じたのか】を複数選択可として問うた質問には、両学年とも「実習の心構え」「先輩からの（としての）アドバイス」「実習への不安が解消」と答えた学生が多かった。詳細は表7に示す。

表7 良かったと感じた内容の詳細

項目	2年生 人数	1年生 人数
a 本学の方針やポリシー	5	4
b 就職やマナー	10	7
c 実習への不安の解消	23	36
d 実習の心構え	49	65
e 実習施設のこと	18	15
f 先輩からの（としての）アドバイス	32	69
g その他	0	2

続いて、2年生には【意識して1年生にアドバイスしたり伝えたりしたこと】を問い、1年生には【先輩からのアドバイスで良かったこと】を問うた。複数選択を可としているため、総回答数に差はあるものの、2年生が意識してアドバイスした項目については概ね1年生に肯定的に受け取られたと見られる結果となった。詳細を図5に示す。

質問【3】では、質問【1】において、学習会を「余り良くなかった」と答えた1名のみが回答した。この1名は余り良くなかったと感じた原因として、「1年生に就職やマナーを理解させることができなかったこと」を選択した。

最後に、来年の実施について2年生には【どのような内容を取り入れるとよいと思うか】を問い、1年生には【期待すること】を問うた。この質問には両学年とも「日誌や指導案の書き方練習」と答えた学生が圧倒的に多かった。詳細を表8に示す。

最後に、2年生用アンケート①と②の結果から、2年生が1年生のときに「先輩からのアドバイスで良かったと感じたこと」と、2年生になって「1年生に意識して伝えたこと」を比較した。いくつかの項目で大きな差が見られ、特に「観察実習と責任実習の違い」や「日誌などの書き方の知識」では違いが大きかった。

表8 来年の交流学習会に期待すること

項目	2年生 人数	1年生 人数
a 本学や幼児保育学科の方針等	6	6
b 就職情報	22	19
c マナー指導	12	20
d 全体会での班別会報告の実施	14	32
e 日誌や指導案の書き方練習	51	60
f 幼稚園と保育所での実習の違いの説明	19	30
g その他	0	1

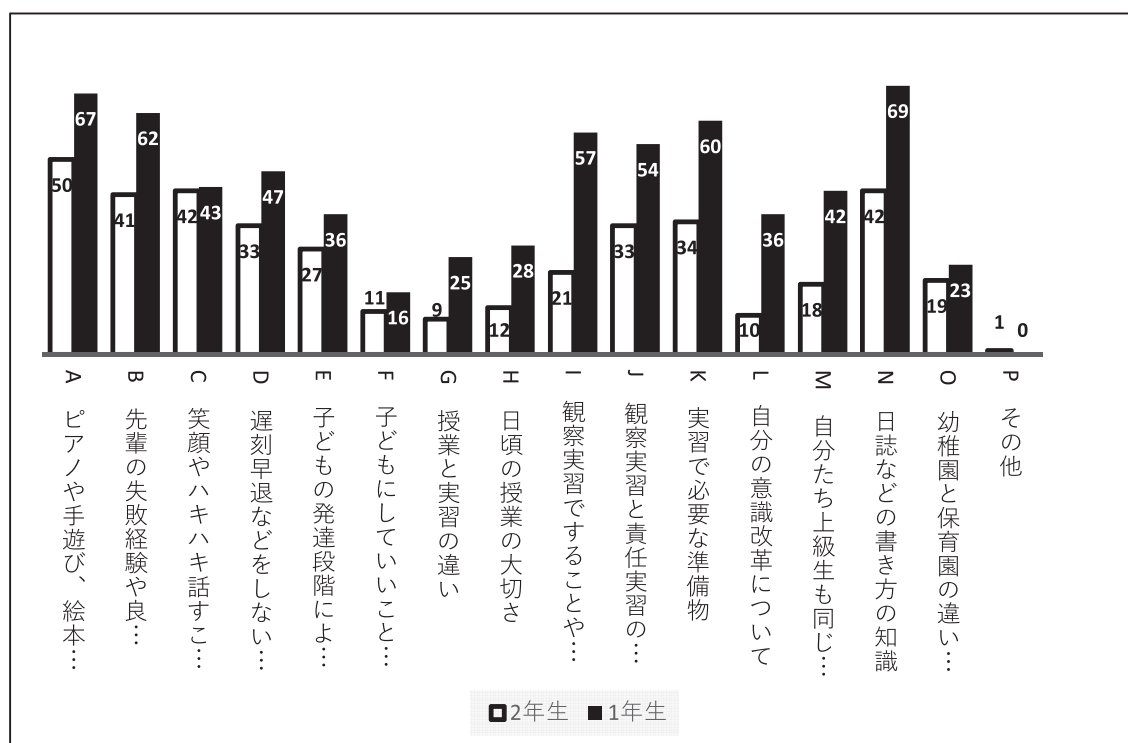


図5 2年生が意識して伝えた内容と1年生が先輩からのアドバイスでよかったと感じた内容

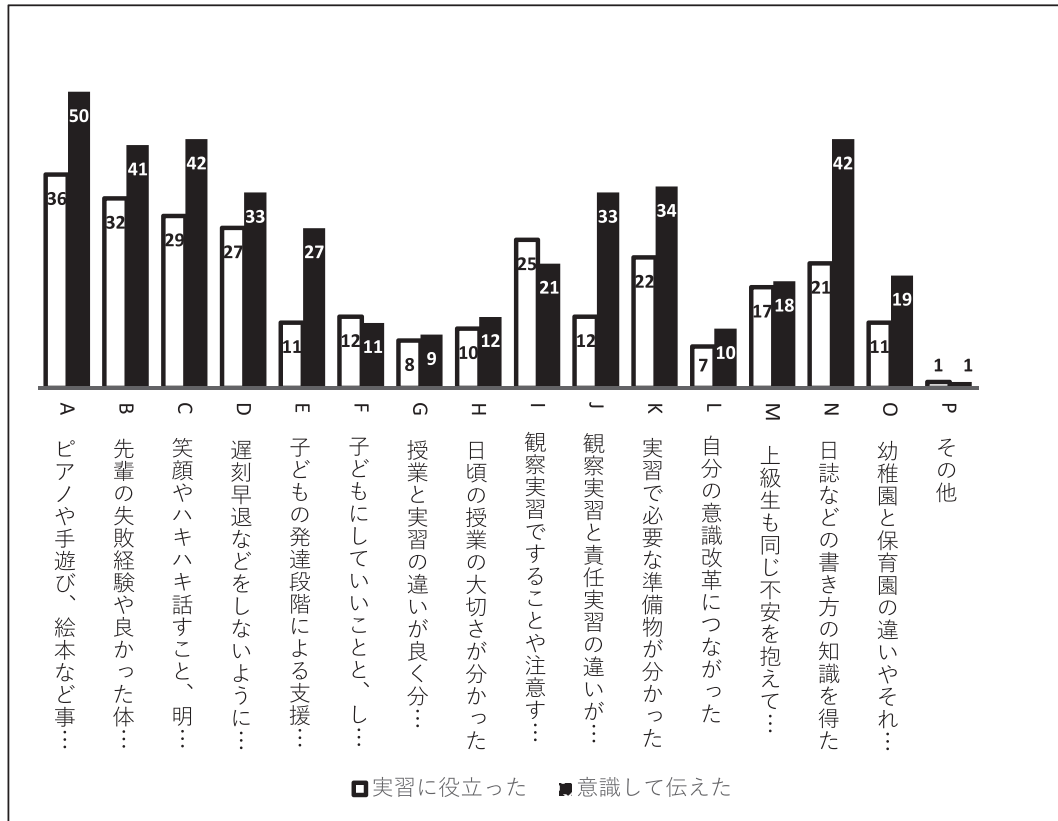


図6 2年生が実習に役立ったと感じた内容と1年生に意識して伝えた内容

V 考察

以上の結果を踏まえ、短期大学生を対象に、異学年相互交流学習会の教育効果について考察を進める。

1 2年生における交流学習会の効果と交流学習会の改善について

まず、2年生における交流学習会の効果を見ると、表1に見られるように、1年生のときに87.1%が交流学習会について肯定的評価をしていたが、3回の実習を終えたこの時期には「実習の役に立った」と感じている学生は64%であった。また、表4に見られるように、2年生時に「余り役に立たなかった」「まったく役に立たなかった」と答えた6名の学生は【なぜ役に立たなかったか】の問いに、「実習の心構えに役に立たなかった」「不安が解消されなかった」「先輩との交流が不十分だった」が多く選択されている。つまり、交流学習会において先輩からアドバイスを受け、不安が軽減されたと自らが感じた状態で実習に臨んだにも関わらず、学生自身の認識

や知識では対応できない状況や子ども等に会ったと推察される。そのことでリアリティ・ショックを受け、その後振り返ってみると、交流学習会は不足であったと感じたと考えられる。これは、否定的評価をした6名の学生だけでなく、「とても役に立った」と答えた2年生の学生が18.7%（表1）であったことから推察される原因である。実際、3回目の実習を終えた2年生に、交流学習会を行うことを伝えると、内容をさらに充実したものにした方がよいという意見が聞かれた。そこで、平成29年度のアンケート結果を踏まえて、内容の充実に向けて学科教員で検討を重ね、班別学習会の充実を図った。結果をみると、平成30年度の班別学習会での交流については、表2のとおり前年度に対し平成30年度では、「班別学習会での交流」が2.1ポイント、「両方」と答えた学生と合わせると5.1ポイントの増加となっており、多くの学生がよかったと答えている。これについての教育効果は、後述するがこの数字に表れている以上に大きなものが認められる（図4、図5）。

全体会よりも班別学習会の評価が高い原因は、

少人数グループにおいて質疑応答を交えた双方向の学習をすることが可能な点であると考え、平成30年度はより少人数で1グループを構成した。平成29年度は11グループであったものを平成30年度には19グループとした。そして、平成29年度の1グループあたりの人数は9～26名であった人数を4～14名にした。教員は参加者としてグループに入るのではなく、ファシリテーター役として2～3グループに1名を配置した。さらに、平成29年度はフリートーク形式で実施したが、平成30年度は班別学習会においてプレゼンテーションを行うこととした。これによって、実習を終えた2年生が、これから実習を迎える1年生にとって必要と考えることをより適切に充実した内容で伝えることができるようになった。こうした改善を加えることによって、伝える側の2年生の思考が整理され、プレゼンテーション形式が威力を発揮したことが分かる(図4、図5)。

こうした2年生のプレゼンテーションの準備は、教職実践演習の授業における実習の振り返りの時間に取り組んだ。1コマ90分をモジュール形式で扱い、30分の学習を3回の準備及びリハーサルに分けて行った。その3回の準備において各自が資料を集めたり、作成したりする能動的な活動が見られた。その結果、交流会当日も班別学習会の90分間を2年生がイニシアチブをとり司会進行・記録を行うなどの動きが見られた。このように2年生に主体的な動きが見られたことは、大きな教育効果の表れであったといえる。すなわち、2年生が1年生のときに不足であると感じた点や、実習を終えてさらに必要であると感じた点などを自分たちのプレゼンテーションに生かすことができ、実習で学んだ成果をより進化させることができた。1年生時に先輩からのアドバイスでよかったと感じたことが実際に実習で役に立ったと実感している学生も多く、学生自身の経験を1年生へのアドバイスに生かすこともできている(図4)。

また、図5に見られるように2年生が後輩に意識的に伝えようとした内容が1年生に高い評価となって表れている点も見逃せない。

以上のように、今回の調査を通して、交流学習会の教育効果は、アドバイスを受ける側の1年生のみにあるのではないことも示唆された。また、表5によると、平成30年度の学習会が自分にとって良かったと肯定的評価をした2年生が71.6%であったということも教育効果の一つにあげることができる。1年生にアドバイスをする役割を担った2年生にとって、すでに3回の実習を終えていることから、交流学習会は実習不安を軽減させる効果を持つものではないと考えられた。しかし、71.6%もの学生が肯定的評価をしたことは、アドバイスを受ける1年生の実習不安の軽減等の効果だけでなく、アドバイスをする側の2年生にとっても、交流学習会の持つ教育効果が高いということである。交流学習会を通して、2年生の学生自身が実習を振り返り、まとめ、伝えることで自己肯定感が向上し、教育者・保育者としての自覚が芽生えるきっかけになったと考えられる。このことは、大きな教育効果として取り上げることができる。

2 1年生における交流学習会の効果について

次に、平成30年度1年生にとっての交流学習会の教育効果について考察を進める。1年生においては肯定的評価が98.7%と非常に高い結果が見られた。しかも、77名の回答者のうち75名が「とても良かった」と答えている。さらに、【何が良かったか】には、班別学習会が44.7%、両方が55.3%であった。全体会が0%であったことから、班別学習会への評価が高いことが分かる。これは、平成29年度アンケート結果を基に班別学習会の充実を図ったことが効果をもたらしただけでなく、2年生の積極的な取り組みと経験を生かしたアドバイスの充実によるものと考えられる。図6から、2年生が1年生時に「先輩からのアドバイスで実習に役立った」と感じることでできなかった内容を、より意識して伝える意図が感じられる。特に、「日誌などの書き方の知識」については、大きな差が見られ、実習中に学生が困ったことを示唆する結果となった。つまり、2年生は1年生のときにもっと先輩からアドバイスを聞いて

て実習に役立てたかったと感じた内容をより意識して1年生に伝えようとしていることが推察された。このような2年生の意識的なアドバイスを含んだプレゼンテーションを受けたからこそ、1年生の肯定的評価が98.7%という非常に高いものになったと考えられる。

Ⅵ 今後の課題

今後は、1年生が実習後に今回の交流学習会を振り返り、次年度の交流学習会においてどのような評価をするか、その結果を詳細に分析することでより効果的な交流学習会のあり方について明らかにする取り組みを続けていく必要がある。そして、班別交流会の内容を今後一層充実させるとともに、全体会のあり方についても検討することが課題である。表8の【来年の交流学習会に期待すること】には、両学年ともに「日誌や指導案の書き方練習」をあげている。このことについては、班別学習会の中で2年生が取り組んでいる内容をさらに充実させることで一定限度対応できると考えられる。しかし、「全体会での班別会報告の実施」が1年生の回答で2番目に多かったことは重要である。なぜなら、1年生は班別学習会で話し合われた内容を全体場で共有することによって、さらに学ぶことを求めていると示唆されるからである。現在の2部構成を3部構成等に変更する等、柔軟に対応していくことも今後の課題である。

今後アンケート調査の継続的な実施と分析を重ね、学生への教育効果についてより深く解明し、得られた結果を今後の教育に生かすことが大事である。そして、学生各自が自身の成長過程と反省を自覚することで、次の実習に向けた準備状況の向上を目指すように促したい。その上で、異学年による交流学習会と実習不安の関係だけでなく、実習そのものの教育効果との関係を解明する研究へ発展させることが望まれる。

引用文献

- 1) 文部科学省, 教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則第6条第1項
- 2) 厚生労働省, 児童福祉法第18条の6 指定保育士養成施設における保育実習の実施基準について, 雇児発第439号, 厚生労働省雇用均等・児童課程局長
- 3) 藤崎真知代・松永あけみ・溝川藍・杉山雅俊・井陽介, 幼稚園教育実習を通じた学生の学び: 実習指導の効果, **2018**, *心理学紀要(明治学院大学)*, 33-47
- 4) 三木知子・桜井茂男, 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響, **1998**, *教育心理学研究(46)*, 203-211
- 5) 荻野佳代子, 教育実習指導に向けて—教育実習生を対象としたストレス研究からの考察, **2017**, *神奈川大学心理・教育研究論集(41)*, 83-88
- 6) 枝元香菜子・山本礼二, 事前授業による教育実習不安の変容—教職志望学生のセルフ・エフィカシーに着目して—, **2017**, *目白大学高等教育研究(23)*, 11-29
- 7) 大野木裕明・宮川充司, 教育実習不安の構造と変化, **1996**, *教育心理学研究(44)*, 454-462
- 8) 本多潤子・櫻井登世子, 幼稚園教育実習における実習不安の類型とその特徴, **2011**, *田園調布学園大学紀要(6)*, 49-60
- 9) 善明宣夫・南本長穂, 教育実習の研究(I): 実習生の不安を中心として, **2004**, *教職教育研究: 教職教育研究センター紀要(9)*, 1-10
- 10) 谷川夏実, 幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容, **2010**, *保育学研究(48)*, 202-212
- 11) 浅川陽子・猶原和子, 幼稚園教育実習についての一考察: 江戸川大学コミュニケーション学科一期生の実態から, **2018**, *江戸川大学紀要(28)*, 63-71
- 12) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター, 子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」: 活動実施の考え方から教師用活動案まで, **2011**

受付日:平成30年10月30日
受理日:平成31年2月18日

Report

The Educational Effects at a Junior Regarding Student Teaching and Practical Childcare Training of “The First and Second-grade Student Study Group Information Exchange ”

Daiki MIYAZAKI^{1*}, Kosaku HAMADA¹, Mayumi IKEZAWA¹, Koichi SUETA¹,
Tadashi TAKEMURA¹, Hitoshi YOSHIMURA¹, Yasushi TERAOKA¹, Yuka TAMURA¹,
Eisaku YAMAMOTO¹ and Paula D. FABIAN¹

Abstract: In this study, we analyzed and considered the results of questionnaires distributed at our junior college on the educational effects of “the group information exchange”, in which first and second-grade students exchanged information concerning student teaching and practical childcare training. We targeted the students for our research in the Department of Teacher Training. There were 83 students of the first-grade and 82 students of the second-grade who participated in the information exchange study group conducted in 2018. We decided that the basis of the study should be on improving the content, and the findings from 86 first-grade students study in 2017.

According to our research, 87.1% of the students positively evaluated their study in 2017. Positive evaluations in 2018 were given by 98.7% of the first-grade students and 71.7% of the second-grade students. Furthermore, the questionnaires disclosed that the second-grade students gave advice to the first-grade students based on their previous year’s study group and practical training experience. By analyzing the results, we will present the educational effect of “the first and second-grade student information exchange” at our junior college in regards to student teaching and practical childcare training, as well as prescribing what future information exchange study should be.

Key words: first and second-grade student reciprocate information exchange study group, junior college of teacher training , anxiety about practical training , nursery school teacher , kindergarten teacher

¹ Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education and Care, *Email: dmiyazaki@kochi-gc.ac.jp